奥羽道中膝栗毛二編 中

へ13
1164
61

特
へ13
1164
61

膝栗毛第三編巻之中

十返舎一九著

東京書籍商組合
田邑爲八

膝栗毛第三編巻之中

小八「ナニ鼻をひろれさ引ぱくおそんなに痛がるほうがある
ものうち 注二「ナニく団子の鼻そうだ鼻を食つきをろく」小八「エそ
の団子ッ鼻を食つろれちやァ痛くそうだろんせ
ろせへ 注三「イヤくどうも痛くてをされねへ」小八「そ
をざッてもそうおさへてだうりねちやァこの程を我ざろう
らねへ早く茸でもつけねへと嵐の歯あや毒がある。
そそれお茶いでがきてこれへ小豆粥を会せねへ 注二「そうやッ

ろ未会ひつろれさ時のこと」小八「それでも虎も用ねされべ
猫の如しとのほろう嵐も用ねれべるとものぢるざいう
注三「エ、ろの様ならいのをいの字ソレをとッてみそれ」
トレくトうろうろうろ「ナンノ是が痛りのう団子の鼻をほう
ろひ鉄さのでおめへの鼻の横ぶで下の方みちがこまッ
ておるろう怪我いねへそれでも
このれへ多ふられねへとうけざる悔合ざろうねへ
小八「エいめまへの人さ涙とろうとろさりのう鼻さそさき

て歌終わられやァーねぇ
むづつの母おもるづ
こんなる庶多真似もし
是様なこつくとーさぴ
まら鉄て是で那面さ
出居を一杯ねそくるっ
出居も皆散ーと方づ
サつく起なせくとぴゃ

もとくおは居るのくさ
をへづそふーされぴは歌
せて互小藤の憂もそこ
朝酒一重の嫌気も出
にそうぴ深川辰者湯づ憂
立ちんそのんねどぴ。
だうりの酒一献との進ぴ。
酒ぴそうそあひれて遠もの。

とある。ゑんを人まねをしれをのぐてゐまが新屋などをそこ出
けるかくて小夜場は所見えの名所なり菊川の傍なり此村をこゆる時一里半
八町をくだりて幸ひ宿ふいさる。宿のはづれ茶屋四五軒ならびて
川と四五軒ばかりの貧しき傍屋あり此川傍村より出て利根川に落
るゆへ宿まで十一度とて徒渉の名物あり「先生後ろいかゞ
おとあるくと食てもきやせう「こりゃどんな氣ぶつまい
るべ 杜丹餅 「おゝねへ婆人上戸ざ「わん
ふーろ〳〵ッ酔てゐんをさろ「サアく〳〵モシあつ

くそこんなせく「ハイ〳〵お四人さんごんさま「序ニ
合ざうりうけてお呉やせく「ハイく〳〵さけもできてる「序ニ名物ざ
けわくていうどんざ「ハヽ獨欲ねくでせん
「ヲヽそよんなら「先生ハ杜丹餅を食さろうと
うもおらア下戸ざと思つて「あんちもざ松戸サアきる
「ヲヽそよんで「ヲヽそよんで松戸で大戸であつて
が幸ひ〳〵きちやア下戸ろと思つて「ざ夜ハしまて

みよ
山吹色の
酒をたべ
ものとも
いふ通ぜん
之通合巻

ろくそもつぎるに「ドレくさーやせうツレおもあく。ヲイ
ふゝ八那小女ごろ子孤合ねへ小女っちよごろア「ドレく
ろんぶろア「何ホーそもだまつて行のへをつのぞもシく
教ろくし嬶へお前のろ「イニ子是ハ去々年ろ事ホ
置まるさ「ハアろ九拾ろまるシテ生國ハ「就後の始末
ちでどざりまさア「ハアそれでこぶ遠方どそーて人ろ
へま「叙父のろた九会場でござらア「そこで支人へ「犯
父の性名松サ「マアそれで支人へいぶ給金へ何程

「七拳ホ書お武ろとうツ極ヤシさ「そこで取番へど
うござ「取番ホ書ろサ「もる飛へ取置てろ「そこし
お客さ衆へいろね世話をやろーやるぶんろをホ
ろふ「ハテさり何も按を立ちきるろへねぺホシ是ハ無居
といろりめざ「十三お客さ衆
ーの中で満座のろでめんぐラト二の事ろいろくめそこ
をろてろろぐ「コリヤ真ヲろこくづれぺさくをどーてヤシでへ
ねのぞ一でろき盛さうんどんを食をてもぺ客へさ事くぐぞ。

あぜコレ隣の爪こと言のうチシと 亭主「ヘイ〳〵真平御免〳〵
下さります 注二「コレハひよんなもので古に苦労をみてナ ン
ござりまするね 仕「ウンニヤよくござる街道のいまゝの
髭ぼう 注三「コレめつそうなをおもってござ
いまするコレ北八おらんをよう
握りコレ氣をつけねへうるく
のをめあがります 仕「コリヤくと慮外のゆござつたコレ真
面ヤアわげてこちやこづれヤイづりをぬとてまねのぞと

と声をそろえてあやまるもぞ不便なる
もあるべけれどこれで那須おこされてまもなく
られて又ねぶり合ふあひだ夢をむさぼること
ざんねんがりてくやしがる[注一]侍の方が三百五拾四文
を[注二]十二もれがなんでおそいのと那侍のうをうめき「それ
ざんとうで仰るも兼知ざんと[注三]ナヨツいめ「の文句を高聲に
辺ろう助ゆすりまでかけて貰のうへねぶ
せられさとまたこのやうなものをさがしてあるく男もしくこまびき
まあひるされさ[注二]ハヲ今の十一屋の一件さ「ハテ那侍が
浸廣告の所ざヲ「ハテ那侍が
むーの浸廣告の所があんまりおもしろいからよびやうござりまーねーか。迫
鼻にせゝらぎまで化てあらうとは

頃の流行のサ「でうのめ合羽（注二）」百に拾八ヲ着ようと云（小八）大きうまうけ
ものをこしらへんそ（注二）「へこそあてこんこ（小八）」
お前ゞこ那里へお出なさる「吾おい奇遇でござんす（注二）」
まづ奥の私宅をご覧遊ばして名所古蹟を
ごらんなるくと行ませうのサ「ハテそれハ風流事ひとの
御ふへ行番せんとハ博識先生書家ごござりまん
お易ひさへをいんぢやもの風流人で金ゞ於在（小八）ますと

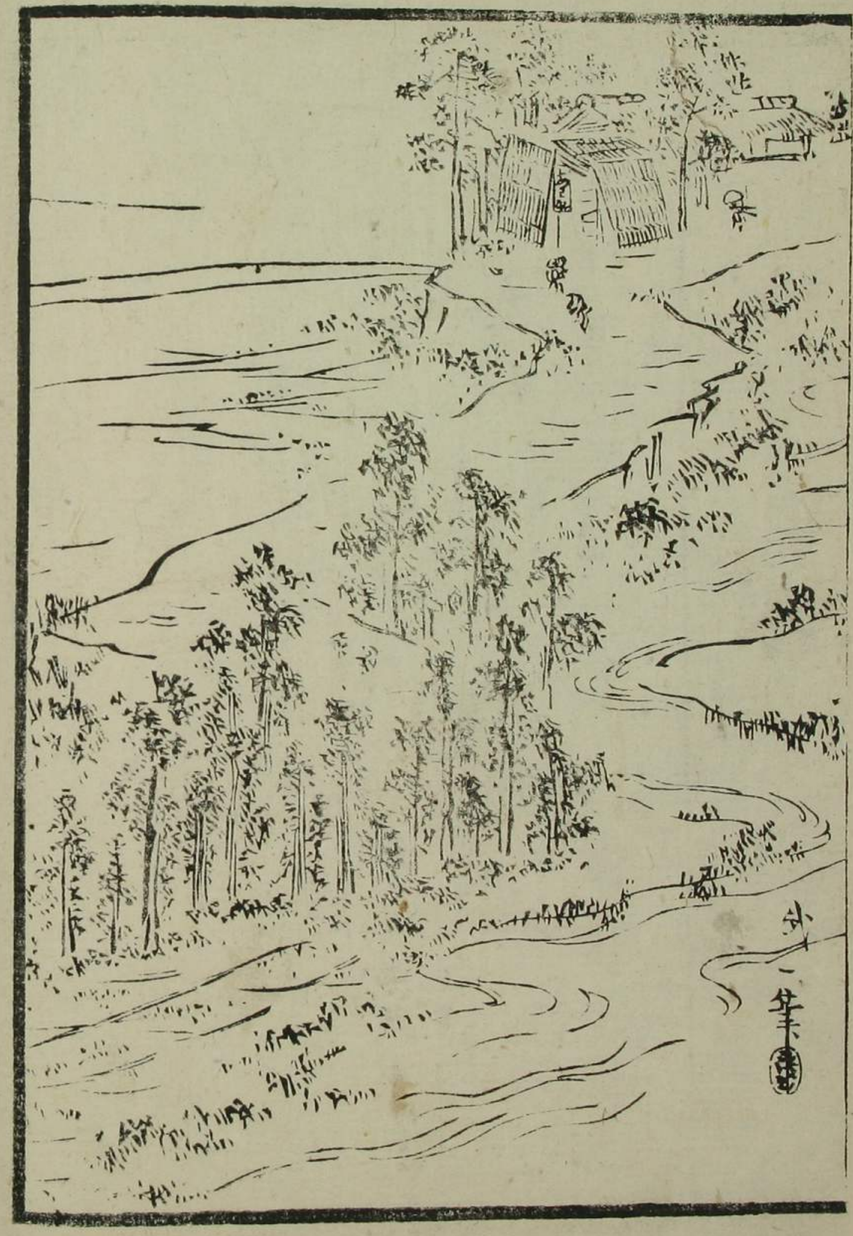
ちやうど初ねんぢうまつ（小八）「そりやア金持の
大家とんでもない唯今ゞ有ませうの（注二）「それハ知ても
サ幾々金ゞをはらのでハ合ぬとゆふ（小八）「ヘン
そうくもねへ「是ゝうゞうゞ岡津村とのゝよ
祝井氏とて牧筆人のゝ孫ゞゞとの普請家ゞありまゝ
きうめゞゝゝのさま「それもそうゞもあるまいよう
ござる家めて普請ゝもめんどう（注二）「そのつゝゝうゝて
いうて昔のゝをうつしてハ何ぢやらつまらぬ

いきおくいっぴきをこてらで買てきものごらう「人そうイのでも
こてらの老いむざのおそれぬへぐ好ごっ。黄ろや濁り好こく
まつねへ〳〵ママ鯉箱ろ鯰卯ろ子「人そりやどれも頂法寺
おそいけれどこらふそんを抱て妻前が有の「人鯰卯
ろうこーぐおそいままョ「人そのっ長好ごってさし色ろ子
「人どれも十宛ってそ百ろ文「人そりや安いりんごまご
家の土産とて二本宛四百が買やせうる工作「人ドレ
ニーぐ浅サヲ山まて鯰へトまを「人祝井さるでとーぐ

「人滑稽三編の序。源三位頼政さま
とのゝ殿さまの御寝所へ清涼殿の御宝。源三位頼政さま
むねへ毎晩〳〵めいさぐる希有怪異の獣を射とめよ！
こってその獣が面が猿で顔が虎で尾尾が蛇で鳴こえ
りんごぐ。イのでも鳴こえそれこそ化物
算人さまの御寝所の屋の四隅へ四人の番人を置て
名世物小生ごさーろこのまでごそれが運つよくん
ぐ仕事判小説ごってそうる大人ごっそまぐ

あん畳へ厳が虎で尾が施の精芸を尽ざう。虎が
さうく施めらくでれつくくものてんざ。面白の
くゝードレおとれやこ五ツ六ツ
つゝをうる奴ざ「大尾ぬのとゝおろと思つて塵ッ赤
くと交ておさぶろくく接扱ひも去ねで果ぬ歩行
そのぐうらねゝドレ此鶏卵をよろ「ドレくと歩て「ドレく
こゝゐねゝぐ会の為やハ一ッ割てよんさろ「ドレく穴
をあけて吸て見やうやくこと。や彼のよも出ねとうち

そのそれ体ぐひろびてあゝアドレもう一ッやアこゝ
つゐ大孔まゐ鶏ふるりかうこと「ドレくそこるとゝッ
ちやぐざあでおつさもシ「あさけぢやあの四百ちよ
銭のうお捨さ「那奴め鶏卵ホ乳をつけさ在
めゝとおりて。田南ぬ曲るまで鄭で祈て本
やアぐつゝえ刻の待をごまの所ざ彼そとねりて
とんざ那奴へのれんざ会ゝ強接



延「我そう今まち名ハ
かまハぬのちくとようまく
でも行まこのナわハ「さうさう」延「そんざく就と
ちくら房と同志ふよりまく
の相屋へのて泊るさろ「それぢやさうーやせう
急度待ゼト
貴附て揚虎ふ
ナーの強弓的をも射さう

延「我そう今まち名ハ
かまハぬのちくとようまく
でも行まこのナわハ「さうさう」延「そんざく就と
ちくら房と同志ふよりまく
の相屋へのて泊るさろ「それぢやさうーやせう
急度待ゼト
貴附て揚虎ふ
ナーの強弓的をも射さう

かくて弥次郎兵衛北八延る旅籠屋房ふりとれ例のたた
言ふみちくさくて行過ぬ日も中雨ふりくふくと
小右衛門相ふれば師走のより大半雑とのり一男ふざ
らりもあく人の肩ふかりあるら「ア二是ハ〳〵旅ざ男よ。
狐父の代ふやア所百姓ざうまふ肥抱ふんざうまふ
そうそうのあら男ざうこれ庄屋殿の小臭那ざう
そうてあふそうそうて居屋のう。桃団のおうさふ
ぢやアあんめへ。ぬふこれ旅ふれおぢうくれる訳や

あのやぢくってよみけつもやつ我ら我ぢろちくり退次のごつ。
我ら女ごつョ。みやつ参ります。ぬへ。のの仁も考ぢ参るでせ
ごとうて権兵衛が稽古まきやる羽屋いる
いぢまのとりちやつ最手のお洗後やごーや
参りても咲るのとりちやつ男ごつお宿致人
ろ女ぢお出るぢ。おめへさやつる喰町へでこつ
時勤宮合ぢまく分三百残てござらう。もめくさ女ぢ亡れ
さーんでもうちちとご参へも亡れまーぬさ和の人

あやつ誠三つ人情さつとこつ逃へ男ごイヤ又るやよりよ
し思ふやつ宿汲人さ女ぢつとつそのけて誰みでもゆのそ
つんさのソレ祝もうへことらの人つ
人の面ぢおぢ通ヨ「ハイくく真平お免せくサア行次さん
早くくねへくさ「大ご事ろ「ちよつ
さうョるつ仁のごろ此方も酒ぢ呑ーくるちこ「ちよつ
ひりやつさうろ「ソレそこの人せ本青笑の拳こ
のぢあるやあれでやつりやつ「よのむらうくト

二ウニツつみてまくのまゝ
を出さるるなりせんとなり

女房「ハイ〳〵今塩魚の焼たのでございまさア「その
ついで新らしくお有めくまア「さよか一服召まアめ
新〳〵ごんぜ。今日ぢやどんなでめん〳〵
八「そのどんをざう細れねくのをもつと速く会せる
気ろ女房「おめくさうぢやござりませうがわりて参る
ござア二「そとんでもねくさうをいふ同家さんざ「こう
が女の独身のくいそれても後ず直ねく下

女房「ヲヤまアどうそうそう二「モウ栗橋まで出てござる
てくちいでんとーるぐ〳〵
ござりますーねく七ツ時の汽車で出でござる
二「ヤアそうやア大変ござりませう八「ドレ
ちつとも早く急ぎやせうト二の面をそちらぐるとまもるく日八
らう出さを二人のうちへ
ひきあそあるこあるこ
二「江戸さんつまらねくところで暮
さちやアねくう東海道ござりますと遠ツて海ござりますと
不案内ござるのねく二「さうよのう
そして今の酒う呑くいそて呑痛ござりますねく

「そうちも取がめりくてきてぴやく往方がぬく
ちっとも早くきのでゐるうちにさんざ
いそ来ませく 注二「おそうアモウ呉ぐひよろくしてあるうね。
くまへせくと言ってくれるまうくふつくと
注汲さん氣をつけませく抜らせ 注二「よくくもめて
くもうくと辞ちやうもうの抜でも出るうたまぎ
かいめぶねへせ氣をつけさつへ 注八「大丈夫ざくく
何のざう鼻をつまれるもうの知まねへ ホイ是ハれ免ませく

へそし顫合せそのてしまへと
聞いろう向のうろきくと人と顫合せをしくくナ 注二「まゐ後も
来ますねへよ 注八「それでもいろちがふとうんとうう
こめのう 注二「ナニそうやうな本の抜ごろう 注八「ドレく
いめますのいけ奴め。すきそ痛へ又まとぶろこのサアくそのうう
くトつををそそきろそのきろぐいぐかーけん 注二「ハハどうくく
くヤイ小ハトよぐごの一向 注二「コリヤアまアどうくろよおちう
あいあく人通もろ。ヲイ引ハ抜ろう旅ろキアイ

女客
坂下ゟ
人の参
待ち
居る
屋雅

てさぞ不本意ながらよびくれおもふまゝをとゝさまそこゝろのこゝろやう大変ごいめいますよ助てくれヤアイ引注二「ヤアくこの奴ご氣のきうねぐでアリくく今助て上るうごうぐとして居ろヤアイ引。若川「でもころげちやアるうねくそ「早くあげてくれねくと狼が来そうござアイ引注二「そ情ねくをいひ出すこぶる色さうござどうもあのうぐねぐアゝ困ることきげさってもとできやアしくめくこゝやアあるうぐ。

ねへみまもく友達を一人乃教上まるのご。蘭学打消陀備後行ひ八年越の朋友も今晩限りのとくれご人の寿命つくらもあるまいものご今までやハよ沢ごさえヨと。そう無ごそもくくる麻をいひ合さるのご長の親おやのこゝろ知らぬんごご那先生や施房ご一所に常の三筋もつるいで下て助ようもあらうのくよ己一人りでいどうもあうぐねへゆハ必已を振をるぐごゝろうして有「早く助て

それ[注二]「北八まづ死ぬるやうすを見て助ろうくと
いふ度ごとの拍子をおもひ出すべし八ッあきつめが
[注二]「ここまで来てそれ[注二]「どうぞ
[注二]「ここまで来てそれ[注二]「ここまで来てそれ
助てそれ[注二]「ここまで来てそれ[注二]「ここまで来てそれ
いふ男ぢゃどうもそうよろこんで
[注二]「ここまで来てそれ[注二]「ここまで来てそれ
[注二]「ここまで来てそれ[注二]「ここまで来てそれ